



## 巻 頭 言

### 家庭菜園 雑感

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事  
日本農業株式会社 常務取締役

田村 守雄

のっけから私事で恐縮であるが、今春、私の住んでいる住宅団地内で、ミニ菜園がオープンした。幸運にも小区画が与えられたので、20年振りに野菜づくりを始めた。

暑い夏の期間、早朝起き掛けの水やりは私の役目であったが、思いの外苦にならなかった。

作物の成長ぶりが意欲を高め、持続させ、励ますのである。隣の区画で、小学低学年の子供がたわわに実ったミニトマトの収穫を、嬉々として手伝っているのを見るに付けても、農業・農作業が人の暮らしに与える、豊かな多面性・可能性の一端を改めて認識させられた。

#### 閑話休題。

わが国が、食料供給の60%を輸入に頼っているのは知識として承知してはいたが、その輸入農産物生産に必要な海外の作付け相当面積が、1,200万ヘクタールに上ると言う試算数字には、正直驚いた。わが国の農地面積は、大規模になった生産調整面積を加えても500万ヘクタールを切っている。自国総農地面積の二倍をはるかに上回る作付けを、外国に依存しているこの国の実態は、食料安保の概念を仰々しく持ち出す迄もなく、素人目にも異状さが際立っている様に思われてならない。

貿易の自由化、食料輸入の拡大容認の立場から、わが国農業の他産業比較での相対的な生産

性・収益性の低さを指摘するのはたやすい。また生活者の視点からは、産地が海外であっても、安価な農産物が魅力的であるのは当然ではある。

但しこれは、安全かつ必要な農産物が、いかなる事態になっても安定的に供給される事を大前提にしている。既に日本向け農産物生産が、海外の地域環境を破壊しているとの声が聞こえる。中国が食料輸入国に転ずるのも、時間の問題とされている。温暖化を含め、気候の変動によっても、農産物収量はもともと年次変動が激しい。加えて、一部輸入作物の安全性問題が、紙面を賑わしたのも記憶に新しい。

経済的な豊かさを頼りにして、世界中から農産物を買求める日本方式が、いつまでも続けられると考えるのは、些か楽観的に過ぎはしまいか。事は全国民の食の安心に関わる、国家としての中長期重要戦略課題である。

強烈なしっぺ返しを受ける日が、迫っていると考えるのを厚くしておくべきではないか。

再び家庭菜園に話は戻る。

ミニ菜園に参加して気になっている事、それは時節柄、菜園全体が無農薬栽培を標榜している事である。農耕地から隔絶されている場所柄か、これまで病害虫はいわゆる有機物資材の散布程度でしのげる程度の発生に止まっている。

目下の所は、緊急防除が必須となるタイミングを狙って行動を起こすべく、作戦待機中である。